

福佐壳神社縁起

(可愛)

福佐壳神社 縁起

「三代実録」の貞観十四年(八七二)十二月廿六日の祭に「郡婦安芸國佐伯郡殼本社に福佐壳、位階二階免戸内祖、表於山間」とあり、即ち、この土地の人、榎本連、福佐壳を賞して位階を与え、戸内の祖を免祭し、その貞節を村の門に表彰したとの記録があります。当時、この奉行は、この地、種笠郷の里長から佐伯の郡司へ、郡司から安芸の国司へ、そして、国司から中央へと伝達され、そして、それにより朝廷から賞され、その記録を中央の正史に留めたのでありますから、正に、佐伯郡稀有のことと言わねばなりません。従って、この栄誉を後世に伝えるべく、恐らく、その旧地に建立されたのが、この福佐壳神社の縁起であります。中世、世人はこの縁起を忘れ、俗稱、福馬明神として祭祀してまいりましたが、江戸、文政年間、広島藩主十世の弟、淺野長徳公の下問により、この縁起の次第を下平良村民もあらためて認識するところとなり、再び、福佐壳神社として、今日に到っているのであります。王朝草むかてあつた貞親の昔から今日まで、実に一千一百余年の歳月が流れておりますが、ここに福佐壳の功德を称え、その余光が永遠にこの地の人々に伝えられることを切に願うものであります。

昭和五十九年六月吉日
奉獻 廿日市ライオンズクラブ

石田本孝 謹誌

佐方八幡神社由来

(佐方)

17

由来

当八幡宮は文政二年（一八一九）の佐方村差出し帳によると、鎮座は往古に遡り、藤島神社と同じと伝えている。中世には桜尾の藤島神主家が神事祭礼を執行、その滅亡の後毛利氏により神田の寄進があり、祭礼は先規の如く行われて来た。しかるに、福島氏に代り、神田は失われたが、以後、近世は佐方村及び廿日市東町の住民の氏神として尊崇されて来た。

参道の石燈籠一对は文化五年（一八〇八）堀田仁助の寄進による。仁助は延享四年（一七四七）廿日市東町、津和野藩船屋敷に生れ長じて幕府の天文方となり、寛政十一年（一七九九）幕命により蝦夷地（北海道）の測量におもむき、その地図を完成した。有名な伊能忠敬は彼が老齢を以て推挙した弟子である。この燈籠は仁助が江戸より故郷の産土の神に献じたもので、銘文の「天文生」は彼の面目を後世に伝えている。また、「船屋敷 田原小左衛門 泉善、廿日市 西村屋久米次郎」寄進の狛犬一对も、当社が廿日市東町の氏神であったことの証であり、「若連中」寄進の石燈籠も貴重である。

昭和六十二年（一九八七）六月吉日

寄贈 廿日市ライオンズクラブ

石田米孝 謹撰

宮内天王社由緒

(宮内)

宮内天王社由緒

主祭神 素盞鳴尊 神武天皇

相殿 大山津見命 天受女命 伊弉那岐命
伊弉那美命 猿田彦命 宇迦魂命

社伝によれば神武天皇御東征の折立寄られたところとして広田社山の麓に祀られ天王宮と呼ばれていましたが天正年中(一五七三―九二)津波によって破損し現在地に移されたと古書にも誌されています。

また当社は古来嚴島神社兼帯の一社であって嚴島の祠官が来てお祭を行つたと伝えられ、社殿や鳥居を造る木材も嚴島から給されていました。また古くは別当光代寺があったが慶長の末(一六一五頃)に廃せられた。

明治以後宮内村上組の氏神社として社格も村社となり上組内の神社を合祀して相殿にお祀りし、八坂神社と改めました。昭和四十四年に氏子の皆様の要望により宮内天王社に再度改称して今日に至っております。

平成五年十二月 宮司 林 新 誌す

山代十一庄屋頌德碑 一城君寺一
 (岩国市本郷町字塚)



山代十一庄屋頌德碑

距今武百有餘年，前蒙英皇於回身時，創設荒乃屯，
 米七十畝，賦課甚重，百姓所苦，以之扶助，
 上頭山代庄，拾遺之名，共同非常，款領天德，出
 現當時，十代，成願，蒙以百姓，路安，可禱，又，
 可哀，故庄屋，拾遺，名，為之，其年，三月十九日，本
 誅罪，被處，前山，一，辭，位，應在，之，爾，未，香，花，
 全，百，姓，不，夕，大，失，命，仁，心，牙，面，有，志，以，無，非，
 佐，蘇，神，田，宮，城，城，志，令，才，興，有，志，以，無，非，
 九，可，定，日，大，幾，鐘，見，才，執，行，志，永，志，故，三，
 以，全，山，代，各，村，長，謀，以，諸，武，助，道，得，此，碑，
 成，君，亦，現，在，各，代，人，神，而，也，
 本，那，通，村，石，以，中，本，集，也，

道路開通記念

(宮内)

道路開通記念

安藝國佐伯郡宮内村廣家六里戸數五百人口載阡四百其土
 鹵砂肥饒其俗知方好義蓋距廣島縣治西方凡四里達于石州
 津和莖之要衝而與防州山代本郷路相逼地方物產之出輸咸
 由此通路以是人馬往來每加頻數而路極險隘行路太苦明治
 十五年村人相議略加修築稍得通車馬費用不支而中止以其
 功不全屢毀傷人畜有志者謂運輪不便則產業不興殖產之本
 在道路開通一人倡之衆和之廿一年九月請于宮内領及佛坂
 事官使技師測地理自砂原至三和村中開經折出領及佛坂
 而迂回于明石壘塩見坂之險迂徐曲折所險爲炭填濕闊窄以
 便於車馬運輸以廿三年十二月起工翌年七月告功竣其總費
 金九千七百七拾八圓餘其三分二乃縣稅支出之其他於村內
 及郡中各町村出之其開鑿里數二里十四町廿四間此諸舊
 道延長凡二十六町其新要地者七町二畝二步毀家屋者八戸
 於是乎畏途相夷無後危險災害之患行旅運搬共榮幸福者其
 幾許乎可謂事業一時而功名千古矣頌者村人相共調立石銘
 姓名以不托之屬余作文以記之余嘉昭代之美譽叙其繁榮其
 銘曰 登難成易 因民之義 公道如砥 就地之利 豈可不記

明治二十七年九月之吉日
 平安 東海道人棉引恭撰文
 小田慧作書之